

■文献名 (2018年)

K. M. ANTSHEL(2018) ATTENTION DEFICIT/HYPERACTIVITY DISORDER (ADHD) AND ENTREPRENEURSHIP, Academy of Management Perspectives, Vol. 32, No. 2, 243-265.

ADHD 注意欠陥/多動性障害と起業家活動¹

■執筆者:

KEVIN M. ANTSHEL, Syracuse University

■要約: ADHD と起業家活動の関係に着目した近年の6つの論文をレビューしている。その結果、ADHD と起業志向、起業意志に関連があることが明らかになった。しかし、ADHD 成人は、他の職業選択が無い為、起業している可能性もある。起業成果に関する研究が少ない為、ADHD の子どもや成人に対して、起業家キャリアを薦めるのは時期尚早である。

■内容

I. Introduction 導入

・ADHD の成功した起業家、例えば、リチャード・ブロンソン(ヴァージングループ)、ポール・オーファレア(キンコーズ)、ディビッド・ニールマン(ジェットブルー)、イングヴァル・カンブラード(IKEA)を取り上げ、ADHD と起業家活動の関係を取り上げるメディアはあった²。

・2014年以降、ADHD と起業家活動の関係についての実証研究が増えてきた。

・psychiatric disorders 精神障害や ADHD に関する研究は、一般的に「欠損モデル」であり、不十分さや病理に焦点を当ててきた。しかし最近の ADHD と起業家活動に関する研究では、ADHD を起業家にとって不利なものでは無いと捉えている。

・起業家研究で明らかにされてきた肯定的な資質(エネルギー、自己確信、独立心、結果に対するコントロール)の考えられる欠点(「ヤヌスの顔³」と表現される)は、ADHD 症状として否定的に捉えられてきた資質から生まれてきたものかもしれない。

・Janus face には、Liabilities 負債と Assets 資産という2面性もあるが(Miller, 2014) この言葉は別の意味でも使われている。

それは、短期的には機能的効果を持つが、長期的には有害な効果をもたらす(Zoellner&Maercker,2006)というものである。

・ADHD は、起業家活動に対して、後者のようなヤヌスの顔を持つ可能性もある。

===

II. Attention Deficit/Hyperactivity Disorder 注意欠陥/多動性障害

1 このレジュメでは、entrepreneurship を「起業家活動」と訳した。その際に参考にしたのが、下記清成氏の意見である。「J.A.シュンペーターの書籍「企業家とは何か」では Entrepreneur に「企業家」という訳語をあてた。最近では「起業家」がしばしば用いられるようになっている。Entrepreneurship はしばしば「企業家精神」と訳されているが、正確には精神をも含めた企業家の全体的な行動を指しているので、本書では「企業家活動」と訳した。企業家精神に相当する言葉は、entrepreneurial spirit である。欧米の多くの研究者は、entrepreneurship と entrepreneurial spirit を使い分けている。(編訳者 清成忠男 2009)」

2 “トム・ハートマンと出会い、彼の本を読みました。その本に書かれていた「ADD 注意欠陥障害について新たな見方」という内容に私はショックをうけました。(中略) ADD と診断される人の特質と狩猟民の特質を比べてみると驚くほど似ています。ということは、もし私が正しければ、ほとんどの起業家は臨床学的には ADD だと診断されかねないのです。ずっと何年も、自分はどこか悪いのだろうかと思慮でなりませんでした。やっとうわかりました。私は ADD なのです。”「起業家の本質」ウィルソン・ハーレル (2006)

3 《ローマ神話》ヤヌス、門の神◆二つの顔を持つ。「両面の、人を欺く」の意を持つ。

・今、ADHD⁴と呼ばれている症状は、inattention and/or hyperactivity-impulsivity 不注意および/または極度に活動的な衝動であり、12歳以前から始まり、他の状況(例:不安)では説明しにくいものを指す(APA2013)。

・これまで、ADHD は子供だけと思われていたが、25年に渡る縦断的調査の結果、成人にも残ることが明らかになった。これらの調査では、ADHD の子どもの50~70%が、成人になっても ADHD の症状を示していた。

・ADHD は、アメリカの小児人口の8~11%に起こり、成人人口の4.4%に起こっている。11 million 一千万のアメリカ成人が、ADHD 症状を持つとみられる。

A. Associated Comorbidities and Features 併存疾患と特徴

・sustained attention 注意の持続、response inhibition 反応の抑圧、working memory 作業記憶の3つが、ADHD 成人にとって弱い実行機能だといわれている。

B. Occupational Impairments 職業的損耗

・ADHD 成人は、教育期間が短く、その結果、低い社会的経済的地位となる可能性が、ADHD を持たない成人よりも高い。ADHD 成人の多くはパートタイムであり、転職回数も多い。

・上司による評価も、ADHD 成人のほうが、低くなっている(Barkley et al.,2006 他)。

C. Strengths and Protective Factors 強みと保護要因

・これまで ADHD の強みや、ADHD 症状と上手につきあってきた人々の資質については目を向けられてこなかった。

・ADHD の強みとして、創造性の向上があげられる(White & Shah, 2006)が、他の研究では、そうではない結果も出ている(Healey & Rucklidge, 2006 他)。しかし、ADHD 成人自身は、自分は創造性があると認識している(Fleishmann & Fleishmann, 2012)。更に ADHD 成人自身は、彼らにはマルチタスク対応⁵と新規問題解決に強みがあると思っている(Fleishmann & Fleishmann, 2012)。

・ADHD の影響を減らす保護要因に関するデータも存在する。個人レベルでは、能力の自己認識と、教育可能スキル(動機づけ、エンゲージメント、勉強スキル)である。家族レベルでは、肯定的な子育て(愛情、暖かさ、勇気づけ、反応よさ)であり、社会レベルでは、社会的受容が保護要因となる。

⁴多動性(過活動)や衝動性、また不注意を症状の特徴とする神経発達症もしくは行動障害である。「注意欠陥・多動性障害」という診断名は、1994年からのDSM-IVのものである。以前のDSM-IIIの注意欠陥障害(attention-deficit disorder:ADD)や、ICD-10の多動性障害(hyperkinetic disorder)を継承するもので、口語的には多動症(hyperactivity)などと呼ばれていた。(Wikipediaより <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B3%A8%E6%84%8F%E6%AC%A0%E9%99%A5%E3%83%BB%E5%A4%9A%E5%8B%95%E6%80%A7%E9%9A%9C%E5%AE%B3>)

発達障害の一つとして、ADHDがある。発達障害の種類として4つ。1)自閉症・自閉スペクトラム障害(ASD) 2)注意欠陥多動性障害(ADHD) 3)学習障害(LD) 4)知的障害。

注意欠陥多動性障害(ADHD)にも特徴的な3つの特性があります。それが以下の通りです。

1.注意困難 2.衝動性 3.多動。不注意とは、必要どころに注意や意識を向けにくい、細かいところに気がつかない、注意の切り替えができない、などです。最後の注意の切り替えの問題については、変に一つのことを集中してしまい周りが見えなくなる、ということです。ADHD=集中できない、というのは誤った認識です。衝動性とは、言葉からして暴力的であるとか粗暴であるとかがイメージされますが、実際にはそういうものではありません。後先を考えずに反応してしまう、ちょっとしたこと気に逸れてしまう、パツと行動してしまう、などのことです。多動とは、一ヶ所でじっとしてられない、無意味に立ち歩く、そわそわして常に身体を動かしている、などです。ちなみに、成人になるとこの多動は比較的落ち着いていくことが多いようです。(心理オフィスK・横浜の臨床心理士によるカウンセリング-「発達障害のカウンセリング」より <https://s-office-k.com/complaint/development> 公開:2015-10-26 更新:2018-10-25)

⁵ 堀江貴文氏「多動力」(2017)

D. Theoretical Overview of ADHD ADHDの理論的概観

- ADHDを説明する理論には複数あるが、最近出てきた dual pathway model⁶ (Sonuga-Barke, 2002)は、それらを統合する可能性がある。
- 更に、このモデルが推敲され、ADHD 症状の多様性について、環境要因がモデレーター-媒介要因になるという説が出されている⁷。
- 本稿では、Dual pathway modelを基に、ADHD 研究とADHD 起業家研究の統合を図ってきたい。

===

III. ADHD and Occupational Selection ADHDと職業選択

- Lasky et al.2016 は、24 歳の ADHD 成人 125 名に対して、質的インタビュー調査を行った。この調査により、person-environment fit 個人—環境フィットで、最も合っていたのは、刺激的な職場環境であった。それは、次の特徴を持つ仕事であった: ストレスがかかり、新規性があり、マルチタスクを必要とし、忙しく、ペースが速く、ハンズオンで出来て、興味をもてるもの。研究者たちは、ADHD 症状は、仕事においては、Context-dependent 文脈(置かれた環境)に依存していて、その仕事の刺激のレベルにより、ADHD 症状が増したり減ったりすると結論付けた。

A. The Importance of Context 文脈(置かれた環境)の重要性

- 特定の職場環境は、ADHD 症状を減少させ、機能の向上につながる可能性がある。前述した Lasky et al.2016 の調査だと、それが、刺激的な職場環境が、ADHD 成人にとっては、ベストフィットだと言える。

B. ADHD and the Context Entrepreneurship ADHDと起業家文脈

- Action under uncertainty「不確実な中での行動」が、多くの起業家精神の定義に含まれている (McMullen & Shepherd, 2006)。
- 起業家活動の特性(例: 能動的な仕事、リスクに耐える必要性)は、ADHD 成人にとって、良い「個人-環境フィット」となる可能性がある。その反面、ADHD 成人は、Conscientiousness 誠実性のレベルが低く(Knouse et al.2013)、課題に対する粘り強さが低い(Halbesleben, Wheeler, & Shanine, 2013)ため、起業家活動に問題となる可能性もある。

===

IV. Entrepreneurship Definitions 起業家活動の定義

- “entrepreneur”起業家は、Self-employed 自営業と、創業した business owner-manager ビジネス オーナー・マネジャーを

⁶ ADHDの病態モデルとして、実行機能及び報酬系の障害という2つの経路からなる dual pathway model が有力視されてきた。実行機能は高次のトップダウンの認知処理過程であり、障害されると抑制欠如が生じる。報酬系の障害によっては遅延報酬の嫌悪が生じる。すなわち、将来の大きな報酬よりも目の小さな報酬に飛びつきやすくなり、報酬遅延に際してじっと待てなくなる。いずれにしても、ADHDの病態を前頭—線条体回路だけでは説明できないと言えよう。

上記のような脳内のネットワークにおいてドーパミン及びノルアドレナリンが中心的な役割を果たしていると考えられている。シナプスにおけるドーパミン及びノルアドレナリンが平生は少量であるので、一時的にかえて通常よりも大量の放出が起こることが、ADHDの基盤にあるとされる。(脳科学辞典より <https://bsd.neuroinf.jp/wiki/%E6%B3%A8%E6%84%8F%E6%AC%A0%E5%A6%82%E3%83%BB%E5%A4%9A%E5%8B%95%E6%80%A7%E9%9A%9C%E5%AE%B3>)

⁷ dual pathway modelを提唱してきた研究者自身が、最近3つ目の経路として時間的処理の障害を提案している。(引用同上)

含む(Rauch & Frese, 2000; Van Praag & Versloot, 2008)

- Entrepreneurship 起業家活動は、長期にわたるプロセスであり、起業意志、スタートアップ、事業の安定と管理、退出、再参入という段階を持つ(Frese, 2009)。
- entrepreneurial intention 起業意志は、entrepreneurial action 起業活動の予測因子となるが、それほど強くはない(Van Gelderen, Kautonen, & Flink, 2015)。
- entrepreneurial orientation 起業志向?は、起業活動がいかに実践されているのかを見るものであり、entrepreneurial behavior 起業行動(Lyon, Lumpkin & Dess,2000)と、entrepreneurial performance 起業成果(Rauch, Wiklund, Lumpkin, & Frese, 2009)の両方を予測する。特に、起業成果の方に関係する(r=.24)。
- 起業志向は、3つのサブ領域を持つ: innovativeness,革新性 risk taking,リスクテイク proactiveness 能動性
- dual pathway model に依れば、ADHD 成人は、おそらく革新性、リスクテイク行動はとりそうだが、能動性は発揮しない可能性がある。

===

V. Systematic Review of ADHD and Entrepreneurship Literature ADHDと起業家活動に関する文献のレビュー

A. Method 方法

- 745の文献要約から、653の全文を読み、647を除外した。それらは、ピアレビューがされておらず、質的、量的研究の基準を満たすものではなかったからだ。残った6つの文献についてレビューする。(Table1)

B. ADHD Diagnosis and Entrepreneurship ADHD診断と起業家活動

- Wiklund et al.(2014)は、15名のADHD 起業家に対して、定性的調査を行った。その結果、impulsivity 衝動性のようなネガティブと捉えられているものも、行動志向のようにポジティブなものとして受け止められていることを明らかにした。著者らは、「起業は、不適応とされる個人が花開く道となるかもしれない」と述べている。
- 上記研究のフォローアップとして、Wiklund et al.(2016)では、同じ15名のADHD 起業家に対してインタビュー調査を行った。その結果、衝動性が起業を動かす要因となっていたことと、Hyperfocusing attention 超集中力?が、起業行動と結果を調整する要因であることを明らかにした。
- Wiklundら(2016)のコンセプチュアルモデルも、Dual pathway modelも共に、衝動性を重視している。

C. ADHD Diagnosis and Entrepreneurial Orientation ADHD診断と起業志向

- Dimic & Orlov(2014)は、ADHD 成人とADHDではない成人、270名に対して、起業志向を調査した。起業志向は、General Enterprising Tendency(GET)test(Caird, 1991)で測定。GETは、達成、自治、独立のニーズや、リスクテイクと創造性の傾向を見るものである。
- ADHDを持つ起業家ではない群のほうが、ADHD 起業家群よりも、大学教育を受けていた。ADHDを持つ群のほうが、持たない群よりも、30%高く起業志向を持っていた。著者らは「ADHD は社会を妨害するものではなく、起業家に向けた人々のツールともいえる」と述べている。
- しかし、ADHD 起業家は、起業家ではないADHD群に比べて、大学教育を受けられなかったため、起業という職業選択しか無かったのかもしれない。
- またADHD 成人の方が、起業志向が高く、起業しようと思ったとしても、そこにたどり着けない可能性もある。起業志向と実際の起業活動との間にはギャップがあり(Lyon et al.,2000)、それは、ADHD 成人のほうがより大きい可能性がある。

D. ADHD Symptoms and Entrepreneurial Orientation ADHD症状と起業志向

- Thurik et al.(2016)は、フランスの306の小企業オーナーに対して、量的調査を行った。その結果、ADHD 症状と起業志向と

の間に、一定の関係が見られた($\beta=177$ 約3%を説明)。

・Dual pathway model は、起業志向の内、革新性とリスクテイクについては予測しているが、能動性は該当していない。そのことから、ADHD 症状と起業志向の関連性が、3%の説明率という低さになる理由も説明できる。

E. ADHD Symptoms and Entrepreneurial Intention ADHD 症状と起業意志

・Verheul et al.(2015)は、オランダの学生に対して、Global University Entrepreneurial Spirit Student Survey(GUESSS)調査を実施。15%の回答者が、ADHD を持つと判定。ADHD 症状と起業意志との間に、正の関係があることを明らかにした。

・しかし、起業意志があるからと言って、実際に起業するかの間には、ADHD を持たない成人においても、やはりギャップがあり(Van Gelderen et al.2015)、そのギャップは、ADHD 成人のほうがより大きい可能性がある。

F. ADHD Symptoms and Self-Employment ADHD 症状と自営業

・起業家活動の定義の殆どに、Self-employment 自営業が含まれる(Van Praag & Versloot, 2008)。

・ADHD 成人のほうが、より自分の事業のオーナーとなり、自営業者となっているとする研究がある(Mannuzza, Klein, Bessler, Malloy, & LaPadula, 1993)。

・Verheul et al.(2016)は、スウェーデンの双子を対象に調査を実施し、ADHD 症状と自営業の関係を分析した。7208 名のデータを使用。12%が自営業者であり、4%が ADHD 成人であった。ADHD 症状、多動性、衝動性は、自営業との間に、正の関係があった。しかし、注意欠如は、関係していなかった。

・また、ADHD は失業とも関係していた。これは自営業という道しか選べなかったということかもしれない。

・この調査は、起業に対する意見や認知(起業意志や起業志向)を問うのではなく、自営業という起業行動に焦点を当てたという点で独自性があるが、自営業の結果まで分析しきれていない。

・全ての ADHD 成人が、自営業として継続できるとは限らない。

G. Posited Mechanisms 仮定のメカニズム

・Wilkund et al.(2016)では、実証された訳ではないが、3つのメカニズムを提示している。1)ADHD 成人は、普通の雇用形態では上手くいかないため、彼らの強みを最大化し、弱みを最小化する方法として、起業を選んでいるのではないか。2) ADHD を持っていたことで、Coping strategies 対処方略と、Resilience 回復力を学習し、それが起業に役立っているのではないか。3)ドーパミン受容体と関係する新規性探索と、リスクテイクが、ADHD と起業に関係しているのではないか。

H. Summary: ADHD and Entrepreneurship まとめ

・ADHD 症状と高い起業志向、起業意志に関連があり、Hyperactivity 多動性のほうが、Inattentive 注意欠陥よりも、それらの関係に影響している可能性があることが、6つの文献からは示唆される。

== =

VI. Future Directions 将来の方向性

・Psychology 心理学と、Psychiatry 精神科の両方とも、起業家活動に関する研究に積極的ではなかった。

・今後の研究の方向性を、起業の段階(Frese, 2009)を参考に提示したい。

A. Entrepreneurship Orientation and Intention 起業志向と起業意志

1. Focus of impulsivity 衝動性に焦点

・衝動性は、Dual path model においても中心的な概念であり、ADHD と起業志向、起業意志の関係をつないでいる可能性が高い。「不確実な中での活動」と「リスクテイク」という起業家精神に関係しているのが、おそらく衝動性である。

・衝動性には、5つの要素が含まれる。肯定的な緊急性、否定的な緊急性、予謀の欠如、忍耐力の欠如、興奮の探索。これら5つに基づく詳細な分析が望まれる。

2. Consider need for autonomy 自治へのニーズを検討する

・今後の研究では、ADHD と起業志向、起業意志の関係の媒介要因として、autonomy 自治へのニーズに関心を払うべきである。起業を動機付ける要因の一つとして、自治と独立できることへのニーズがある(Lumpkin, Coglisier, & Schneider, 2009; Van Gelderen & Jansen, 2006)。

・ADHD を持つ子供と成人は、自分たちには低い自治しか無いと受け止めている。だからこそ、より自治ができる環境を求めのかもしれない。

3. Assess behavioral intention 行動意志を見る

・起業意志は、行動意志の一つと考えられている。

・もしかすると、現在の起業意志の項目は、ADHD 成人の希望を反映していて、本来の行動意志を反映していないかもしれない。それが、起業意志はあっても、実際は起業していないという行動に表れている可能性がある。

4. Resolve methodological constraints 方法論の問題解消

・ADHD 症状のみしか扱ってないことや、コモンメソッドバイアス等の問題を、今後の研究では解消すべき。

B. Starting Up, Stabilizing, and Managing the Business スタートアップ、事業の安定と管理

1. Focus of entrepreneurial outcomes 起業成果に焦点

・今後の研究では、起業成果、例えば、成長、利益、寿命、満足といったものに焦点を当てるべき。

・起業を目指しても失敗する事は、ADHD を持たない成人でも普通に起こる(Davidsson & Honig, 2003)。

・起業成果について報告した唯一の研究(Wilkund et al.2016)では、ADHD 起業家の約半数が、起業に失敗もしくは低いレベルでの成功という結果になっていると言う。

2. Person-environment fit and entrepreneurial outcomes 個人-環境フィットと起業成果

・刺激的な環境は、ADHD 症状を減少させる最上の個人-環境フィットであると言える(Lasky et al.2016)。

・今後の研究では、どのような「刺激的な環境」が、ADHD 起業家の起業成果につながるのかを明らかにすべきである。

・ADHD 症状は、プロジェクトマネジャーの作業効果には負の関係を持つとする研究もある(Coetzer, 2016)。もしそうであるならば、ADHD 起業家は、プロジェクトマネジャーを別に雇う必要があるかもしれない。

・Innovative opportunity 革新機会のほうが、Imitative opportunity 模倣機会よりも、ADHD 成人にとっては魅力的と言える。

・ADHD 症状と起業家の衝動性は、より不確実な環境のほうが、力を発揮すると考えられる。今後の研究では、これらの仮説の実証が期待される。

3. Explore moderators of outcomes 成果への調整変数の調査

・今後の研究では、成果に影響する調整変数を明らかにする必要がある。考えられる調整変数として、知能、ADHD 薬剤、個人的資質、社会的スキルと子供時代の環境、超集中力がある。

VII. Policy Recommendations 政策提言

・起業家政策は、promotion 促進、education 教育、barriers 障害、financing 金融、business support 事業支援の領域に分かれている(Auderetsch, Grilo, & Thurik, 2007)。

・これまでの研究から、ADHD 成人は起業を目指すかもしれないが、起業活動においては困難さを経験する事になるだろう。

- ・ADHD 成人に対して起業を促すような教育プログラムを動かす前に、更なるデータの蓄積が必要である。
- ・これまでの起業家教育の殆どは、伝統的な教育手法で行われている(Hytti & O' Gorman, 2004)。ADHD 人口に対する教育手法は、変えていく必要があるだろう。

VIII. Conclusions 結び

- ・ADHD 症状は、個人-環境フィットに影響される。
- ・注意欠陥よりも多動性のほうが、ADHD 症状と起業志向、起業意志の関係に影響していた。
- ・ADHD 成人は、起業環境のほうが、力を発揮できる可能性が示唆された。
- ・しかし、今回のレビュー結果から、1)ADHD 成人は、他の職業選択が無い為、起業している可能性もある 2) 起業成果に関する研究が少ない為、ADHD の子どもや成人に対して、起業家キャリアを薦めるのは時期尚早である⁸。

■感じたこと

- ・仮に、ADHD の「衝動性」によって、組織での雇用状態から、勢いで、Self-employed 自営業者(=起業)になったとしても、その継続には「顧客の開拓と維持」が必要になる。それには「衝動性」とは違う資質や能力(例:誠実性)が必要になる。そこを他のメンバーで補完するなら、やはりチームか組織は必要になる。その場合、ADHD 成人は、対人関係の維持に苦労するのでは・・・。
- ・ADHD だから、起業するのか? 起業したから、ADHD になるのか?⁹

以上

⁸ “発達障害の特性を強く有したまま人生を駆け抜けていける人も、稀にいます。それはそれでとても素晴らしいことです。しかし、僕を失敗に導いたのは、まさしくそのような発達障害者たちの神話でした。(中略)僕はジョブズではない。エジソンでもない。社会の中で稼いで生きていくためには、己を社会の中に適応できる形に変化させていくしかない。言うなれば、呑み込むべき事実はたったそれだけなんです。”「発達障害の僕が食える人になっちゃったすごい仕事術」借金玉 (2018)

⁹ ” 起業家的な特性とメンタルの疾患は、紙一重のところにあるのだ。UC Berkeley の調査によれば、ADHD (注意欠陥・多動性障害) の生涯罹患率は起業家で 29%、一方の対照群で 5%。躁状態とうつ状態を繰り返す双極性障害は起業家で 11%、対照群で 1%。薬物やアルコールなどへの依存は、起業家で 12%、対照群で 4%。いずれの精神疾患においても、起業家の罹患率は著しく高い。” 「起業家うつ 増加の実態、メンタルヘルスを損なう 6つの事情」株式会社 cotree 代表取締役 櫻本真理氏 (2019.1.18) <https://diamond.jp/articles/-/191198>